（５）第５期高知県産業振興計画における産業成長戦略のうち、農業分野の施策展開に占める土佐茶振興の取組について

農業分野の施策展開に占める土佐茶振興の取組について

農業分野の施策展開　～地域で暮らし稼げる農業～

分野を代表する目標として、農業産出額等の向上
令和４年1,081億円→令和９年1,224億円→令和15年1,248億円

柱１　生産力の向上と持続可能な農業による産地の強化

柱２　中山間地域の農業を支える仕組みの再構築

中山間に適した農産物等の生産

土佐茶の生産振興と販売・消費拡大

柱５　農業全体をけん引する基盤整備の推進と優良農地の確保

柱４　多様な担い手の確保・育成

柱３　流通・販売の支援強化

資料：高知県農業振興部作成を拠点で改編（以下同）

土佐茶振興（令和６年度）

令和３年度に『土佐茶振興計画』を策定

計画期間10年

生産対策、消費・販売拡大対策強化で所得向上

①生産安定・担い手確保　②消費・販売の確保

計画に基づく支援

【課題】
生産者の高齢化、荒茶価格低迷、生産資材高騰、栽培条件の不利性
→　栽培意欲低下、放棄茶園拡大

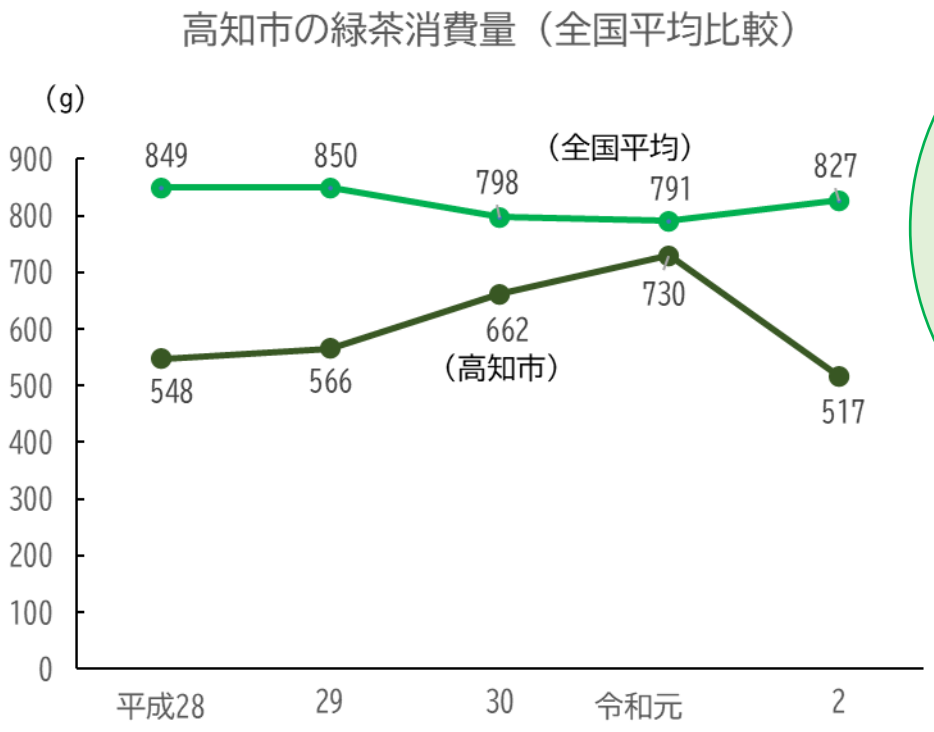
【対策】
栽　培　→　作業省力、改植・台切り等茶樹の若返り・樹勢回復
加　工　→　茶工場高度化、茶品質向上の取組
担い手　→　産地体制強化、担い手確保

①生産安定・担い手確保
栽　培　作業省力　自走式茶園管理機、作業道の導入拡大　令和５年度　実績なし
令和６年度計画　自走式茶園管理機、乗用茶園管理機・摘採機の導入作業道整備
改植・台切り等　令和５年度　中切り608a、改植6a
令和６年度計画　台切り25a、中切り680a
加　工　茶工場高度化、茶品質向上の取組　令和５年度　茶自動軽量袋詰機２工場導入
令和６年度計画　火入れ機、ティーパック充填包装設備
担い手　産地体制強化、担い手確保　令和５年度　茶産地計画策定、30代担い手２名や茶研修生１名確保
令和６年度計画　茶園管理一元化・組織化の検討、有機栽培紅茶による新たな担い手確保

②消費・販売の確保
消費拡大、販売拡大、輸出への挑戦、お茶の文化の振興（次ページへ）

②消費・販売の確保（つづき）年間販売額1.9億円（令和２年）→目標10億円（令和13年）

消費拡大



資料：高知県農業振興部農産物マーケティング課

高知市の一世帯当たり緑茶消費量は、全国平均に比べて大幅に下回っている

目標
年間販売額
1.9億円(R2)
↓
10.0億円(R13)

達成するためには

地産地消の徹底

スイーツコンテスト

新茶まつり土佐茶まつり等

事業所等で土佐茶の利用

量販店の試飲販売

水出し茶の紹介

②消費・販売の確保（つづき）年間販売額1.9億円（令和２年）→目標10億円（令和13年）

販売拡大

お茶と菓子のセット商品開発、企画・販売の販路開拓支援は極めて有効と思われる。

目標
年間販売額
1.9億円(R2)
↓
10.0億円(R13)

達成するためには

営業の強化

- 継続的訪問営業
- 新たな取引先の開拓
- 土佐茶と和菓子をセットにした贈答用商品の企画・販売

Good Idea

魅力ある商品づくり

- パッケージデザインの磨き上げ
- Web販売土佐茶コーナーの設置
- お茶単品でなく和洋菓子とのセット商品など新たな商品開発

Good Idea

茶生産農家による販路開拓の支援

- 茶生産農家の新たな販路開拓への支援

Good Idea

②消費・販売の確保（つづき）年間販売額1.9億円（令和２年）→目標10億円（令和13年）

輸出への挑戦

目標
年間販売額
1.9億円(R2)
↓
10.0億円(R13)

達成するためには

輸出事業計画に基づく取組推進

- 高知県
- 市町村
- アドバイザー
- ジェトロ高知
- 高知貿易協会

トピックス

令和７年１月21日　日本農業新聞抜粋
論説　**抹茶生産で低迷打破を**　～緑茶輸出額過去最高～
2024年　1～11月緑茶輸出量　321億500万円
（前年同期比対比124%）うち**抹茶を含む粉末状緑茶239億円**
資料：農林水産省より
抹茶消費・・・抹茶ラテ、スイーツ、菓子原料
抹茶原料・・・**碾茶（てんちゃ）**

減少傾向にある茶生産において、労力に見合う価格実現により
で作業効率が悪い急傾斜の山間地の茶畑でも営農継続が可能
有機栽培も可、霧がかかる産地景観、農家の物語もブランド化

↓　**高知県の状況そのもの**

碾茶増産のネック・・・栽培時、覆いをかける労力負担、
煎茶と異なる製造施設の整備

国として茶振興の基本方針で、碾茶への転換強化を検討しており、支援の一層の充実が求められる。

②消費・販売の確保（つづき）

お茶の文化の振興、その他

目標
年間販売額
1.9億円(R2)
↓
10.0億円(R13)

達成するためには

お茶の文化に触れる機会の創出

Good Idea

教育委員会と連携

茶生産農家・日本茶インストラクター派遣

美味しいお茶の入れ方教室の開催

土佐茶のＰＲ強化

観光分野との連携

Good Idea

教育委員会と連携

風光明媚な茶畑・茶摘み体験ツアー

茶畑を観光スポットとしてＰＲ

（６）高知県内の茶栽培農家等を訪問した際の情報

203_安芸市　東岡昭二氏

令和６年６月18日、安芸市で土佐茶の栽培を行っている東岡昭二氏を訪問し、意見交換を行った。

東岡氏からは、労力面において園地での栽培・管理上の問題はないものの、近隣の荒茶工場の閉鎖により少し離れた工場に搬入せざるをえず、工場の操業日数の関係等から園地の半分程度は摘採することができないうえに、工場の作業員の高齢化に伴う後継者不足が深刻とのことであった。さらに、これ以外の工場への搬入は長距離となり、茶葉の品質が大幅に低下することから、栽培を継続することができなくなる恐れがあるなどの話があった。

東岡氏が栽培している土佐茶は、山間部の急傾斜に位置し、作業上においては厳しい環境下であるものの、気温日較差が大きい中で育ちコクのある味わい深い品質が特徴である。そのような銘茶の栽培を継続するためには、摘採後の加工施設の確保が喫緊の課題であると言える。

中国四国農政局高知県拠点では、今後も生産者との意見交換等を通じて、茶の栽培継続はもとより、輸出拡大にもつなげられないか分析を進めてまいりたい。

386_いの町　国友農園

令和６年７月２日、茶の有機栽培を行っている国友農園（いの町）を訪問し、國友代表取締役と意見交換を行った。

自生する茶木で栽培されている山茶は、独特の香り、味、形態を有しており、日本で多く栽培されている中国種より、インドのアッサム種が関与しているという研究結果が出ている。

國友代表取締役は幅広い知識をもって茶の研究を重ねておられます。「自生した園地及び挿し木にした園地は、いずれの山茶ともすべて手摘みし、自ら所有している施設で加工し、百貨店、道の駅、インターネット等で販売しているが、愛飲家が多く、特にインターネット販売は売切れ状態となっている。」とのこと。また、「茶の魅力を発信することにより農家を守る取組をお願いしたい。」との要望を請けた。

国友農園ホームページ　https://www.kunitomo-f.co.jp/

411_津野町　天空四万十

令和６年７月２日、茶の有機栽培を行っている株式会社　天空四万十（津野町）を訪問し、稲田取締役と意見交換を行った。

平成元年に茶の栽培をはじめ、アレルギーを持った子供でも飲める有機による茶葉の栽培に取り組み、茶葉をイノシシやうさぎなどの食害から守りつつ、栽培を継続している。

また過去には、スウェーデン、フランス、香港など海外への輸出を試みたものの、国内での販売と比較して価格差が少ないこと等から、現在、模索中とのことである。

今後とも茶の栽培を継続するために、安定した需要と取引価格の上昇に繋がるよう、我々としては、高知の茶の素晴らしさを発信してまいりたいと思う。

天空四万十ホームページ　http://oku-shimanto.com/

387_仁淀川町　池川茶業組合・・・聞取りより抜粋

■　経営の概要
・池川茶業組合の組合員は、６名でうち正組合員は４名、準組合員は２名である。
・池川茶業組合全体で、10ha程度の栽培がある。なお収穫は、個人で行うが茶工場及び加工作業は共同で行っている。
・茶業組合の販売については、小売りが横ばいであるが、市場出荷は減少している。
・令和６年度が中山間直接支払制度の最終年度にあたり、組合員６名のうち品原氏を除く４名が茶栽培から撤退する可能性がある。
・地域おこし協力隊の２名が現在研修中で、担い手として大いに期待されており、可能な限り早期に戦力になれるよう技術継承を行っているところ。

■　輸出について
・輸出に関する会議などへ参加はしているが、輸出実績はない。
・ヨーロッパ、アメリカは抹茶の需要しかない。インドには市場が出来上がっていないので、検討している。
・日本の茶は、海外にはパウダーのイメージが強いので、煎茶のパウダーをイメージしている。
・和紅茶に関しては、少量作っているが、輸出出来るほどの量はない。また、手間のわりに値段はたいして良くない。
・和紅茶は甘味が抑えられていることから、海外には甘い紅茶がうける。お茶としての販売は難しい。

412_四万十町　（株）広井茶生産組合・・・聞取りより抜粋

■　経営の概要

・200アール程度の栽培面積、春先に１番茶収穫、２番茶として和紅茶を６月下旬ごろから収穫する。

・和紅茶の栽培方法は多種多様、15～16年前当初、和紅茶栽培農家数は全国で60か所程度だったのが、ブームに乗って、現在1,000か所超である。

・処理能力90kgの機械において、生葉で１日に捌ける量は250kgが限度である。

■　今後の課題・検証

・30年以上経過した収穫用の機械を使用しており、耐用年数超過のうえ１億円という高額購入であったため現在は、故障箇所を修理しながら使用している。

・紅茶を量産するため、加工用の機械の導入を検討したが、現時点において、緑茶の継続が保証出来ないことから踏み込めない。

・茶の栽培を減農薬ですると２番茶などの伸びが悪くなる。また、無農薬無化学肥料で栽培すると、各個人の証明が必要で、取り組んでくれる農家と取り組んでくれない農家がある。

・和紅茶は製造量が少ない分、希少性で単価を高くするしかない。

・「紅吹雪」など薫り高い品種は、関東近辺に出回っており、高知においては「初紅葉」といった紅茶品種があり、付加価値を付けるのが課題である。

・柚子の香りをつけた「アールグレイ」が意外とおいしく、量産すれば売れると思うが、商品化が難しい。ミルクティーの生産に関しても売れる自信はあるが、商品化が難しい。

・インターネット販売に関しては、発送の手間やクレーム対応など想定されるリスクがあって踏み切れていない。

・商品開発については、県外資本に頼らざるを得ないことから、県内あるいは最低でも四国内に商品開発が出来る会社が必要である。

■　輸出について

・輸出にあたっては、海外との価格交渉を出来る者が必要。

・海外では無農薬無化学肥料の茶が好まれるが、雑草処理の維持管理が特に難しくなる。

■今後の課題・検証

・今後の経営継続にあたって懸念される点としては、売り先の確保及びいかに安定した収入を得られるかが課題。